

ふるさとの 其の43 誇り

登山者の安全を守る

厨子入り大日如来坐像

市指定文化財

地域に守られた神秘

現在、登山はレジャーという側面が強いようですが、古来、山は信仰の対象であり、登山は宗教行為そのものでした。

芦安地区大曾利の諏訪神社には、この厨子に納められた大日如来坐像が安置されていますが、この仏様も元々は、日本第2位の標高を誇る南アルプスの主峰、北岳（標高3193m）の山頂に安置されていたとも伝えられています。

明治以降、いつのまにか山頂から行方不明になり、その後発見されましたが、保管していた人々が次々に不幸になり、現在の諏訪神社に安置されたという伝説も残る神秘的な仏様です。

仏像というと、野外に安置される石造りのものを除き、木で彫られたものが一般的ですが、この仏様は厨子ともども銅で造られています。富士山などでもそうなのですが、とくに山岳信仰にかかわる像の多くが銅などの金属製です。

銅という素材が木よりも耐久性が高く、山中に置かれ風雨にさらされたり、山からの上げ下ろしの負担など、過酷な環境に耐えることから選ばれるようになったのでしょう。

つまり、この銅製の大日如来様は、北岳などの山岳を多くかかえる、南アルプス市という地域を象徴する仏様のひとつといえるのです。

この仏様を納める厨子には四隅に鈴がつけられ、鈴は風が吹くと鳴り、登山者を導いて、その安全を守ってくれたのだそうです。

本格的な夏山シーズンを迎え、多くの登山者でにぎわう南アルプス。この高さ10cm程の小さな大日如来様は、今もふもとから登山者の安全を祈り、見守っています。



広河原から大樺沢へ抜けるルート



大曾利の諏訪神社 写真は、平成21年に行われた、文化財防火デーの際の文化財持ち出し訓練の様子。大日如来様は地域で大切に守られています。



厨子に納められた様子。



大日如来坐像 鎌倉時代の作と推定されています。